

廃棄物処理法等に関する制度の見直しについての要望書

平成26年12月4日

環境大臣 望月 義夫 様

九都県市首脳会議として、別紙のとおり要望いたしますので、特段のご配慮をお願いいたします。

九都県市首脳会議

座長 神奈川県知事 黒岩 祐治

埼玉県知事 上田 清司

千葉県知事 森田 健作

東京都知事 舩添 要一

横浜市長 林 文子

川崎市長 福田 紀彦

千葉市長 熊谷 俊人

さいたま市長 清水 勇人

相模原市長 加山 俊夫

(別紙)

## 廃棄物処理法等に関する制度の見直しについて

廃棄物の処理及び清掃に関する法律(以下「廃棄物処理法」という。)については、その時々々の廃棄物問題を取り巻く状況等を踏まえ、度重なる改正が行われており、直近の主要な改正は平成22年度に実施されています。しかしながら、現下の厳しい経済情勢においては、産業廃棄物の処理費用削減をねらいとした不法投棄等の不適正処理の増加が今後も懸念されるところであり、廃棄物適正処理の推進はその重要度を一層増しています。

また、廃石綿等やポリ塩化ビフェニル(以下「PCB」という。)廃棄物といった有害廃棄物の処理対策や電子マニフェストの普及等については、現状において十分な推進がなされておらず、なお多くの課題が残されています。

九都県市首脳会議としては、不適正処理のない健全な資源循環型社会を早期に実現し、将来世代に良好な生活環境を引き継ぐことが、現代に課された使命であると考えます。そのためには、国及び地方公共団体が連携し、不断の努力をもって、これら個々の課題に対して効果的な制度の創設や運用の見直し等に努めなければなりません。

よって、このたび制度の見直し等が必要と考える事項について、以下のとおり要望します。

### 1 産業廃棄物処理施設の許可における審査基準の明確化

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>(1) 産業廃棄物処理施設の設置許可の審査における経理的基礎に係る具体的かつ客観的な審査基準を明確にすること。</li><li>(2) 産業廃棄物処理施設の設置許可の審査基準における「周辺地域の生活環境の保全及び環境省令で定める周辺の施設についての適正な配慮」の内容を具体的に規定し、判断基準を明確にすること。さらに、この基準については、地域の実情に応じて都道府県及び政令市の裁量を認める規定も盛り込むこと。</li></ol> |
|--|

(説明)

- (1) 産業廃棄物処理施設の設置許可の審査における経理的基礎については、廃棄物処理法において、「施設の設置及び維持管理を的確に、かつ、継続して行うに足りるものとして環境省令で定める基準に適合するものであること」とされているが、環境省令(同法施行規則)においては、「施設の設置及び維持管理を的確に、かつ、継続して行うに足りる経理的基礎を有すること」とされているのみで具体的な基準が示されておらず、審査において苦慮している。産業廃

棄物処理業の許可についても同様であるが、経理的基礎については申請者の能力に係るものであり、自治体によって異なる基準により審査されることは望ましくなく、国により具体的かつ客観的な審査基準が明確に示される必要がある。

- (2) 同法において規定される「周辺地域の生活環境の保全及び環境省令で定める周辺の施設についての適正な配慮」に関しても、周辺の施設の範囲や適正な配慮の具体的な内容が環境省令において定められておらず、(1)と同様に審査において苦慮している。このため、「適正な配慮」の内容を具体的に規定し、判断基準を明確化する必要がある。さらに、環境保全上配慮する必要がある場所は、地域の実情によって異なるため、都道府県及び政令市が地域の実情に応じて判断する仕組みが必要である。

## 2 産業廃棄物処理施設設置許可の失効規定の新設

産業廃棄物処理施設の設置許可取得後、その設置工事が相当な期間を超えて着工されない場合又は中断している場合には、当該設置許可の効力が失効する規定を設けること。

(説明)

産業廃棄物処理施設の設置許可を受けたにもかかわらず、その設置工事が相当な期間を超えて着工されない事案が生じている。このような場合においては、期間の経過により周辺環境の変化が生じ、当該許可を維持することが生活環境の保全上不適当となるおそれや、許可取得時に計画したものと同等の設備を調達できなくなったり設置完了時点の技術基準に適合しなくなったりするおそれがある。しかしながら、現行の制度では、このような場合において当該許可の効力を失わせることは困難である。

したがって、過去に設置許可を受けた施設であっても、その設置工事が相当な期間を超えて着工されない場合又は中断している場合にはその事実をもって、行政処分によることなく、当該設置許可の効力が失効する規定を設ける必要がある。

## 3 製造・販売事業者による適正な処理に関する措置

危険、有害、または破砕等が困難という理由から市区町村で適正処理が困難な一般廃棄物については、拡大生産者責任の考え方に基づき、製造・販売業者等による回収・適正処理を義務付けしたシステムの構築を検討すること。

(説明)

市区町村による適正な処理が困難な一般廃棄物のうち、在宅医療廃棄物、廃スプリングマットレス等については、一部の事業者による回収・処理が行われてい

るものの、いまだ業界全体として適正処理システムが確立、浸透されていないため、事業者による回収・適正処理システムを確立、促進するよう事業者指導の強化が必要である。

また、危険性・有害性の高い廃棄物（使い捨てライター、溶剤、塗料、化学薬品、農薬等）や破砕作業等が困難となる堅牢な廃棄物（スキー板及びサーフボード等のFRP製品、耐火金庫等）については、市区町村の廃棄物収集運搬及び処理過程において適正な処理が困難となっているうえに、製造者等による回収・適正処理も確立していないため、市区町村の一般廃棄物処理事業に支障をきたしており、拡大生産者責任の徹底の観点からも事業者による回収・適正処理システムを早期に確立することが必要である。

さらに、広域認定制度を積極的に活用するなど、事業者による回収・適正処理システムが円滑に機能するよう推進することが必要である。

#### 4 再生利用の促進について

溶融スラグ、エコセメント、木材チップ再生品、再生骨材等の再生資材の需要拡大に向けた所要の措置を講じること。更に、日本工業規格に適合した溶融スラグは、製造する市町村以外の公共工事又は民間工事で利用される場合にも、廃棄物の処分に該当しないよう措置すること。

なお、国の公共事業においても、再生資材の利用促進を図ること。

##### （説明）

溶融スラグ、エコセメント、木材チップ再生品、再生骨材等の再生資材については、現状においてはバージン材との競争力も乏しく、需要も少ない状態である。これらの状況を改善するため、グリーン購入制度の拡充など再生利用の促進を図るための措置が必要である。

一般廃棄物の溶融固化により得られた溶融スラグは、焼却灰の減容化に資するとともに、土木資材としても利用でき、最終処分場の延命化に一層効果的なことから、積極的に公共工事等へ利用するよう努めているところである。

九都県市内においては、今後、溶融施設の整備が進められ溶融スラグの製造量は増加することが見込まれているが、公共工事が減少していることもあり、溶融スラグを製造する自区内の公共工事だけではすべてを利用しきれない状況にあるため、他の市区町村や都県、国、民間工事などにおいてもより積極的に利用していくことが求められている。

平成19年9月28日付け環廃対発第070928001号では、溶融スラグを製造する市区町村が自ら発注した公共工事で利用する場合と、それ以外の市区町村内や民間工事で利用する場合において廃棄物の処分に該当するか否かの扱いが異なっ

ているが、今後溶融スラグを各行政機関や民間企業などが土木資材として利用し、利用量を拡大していくためには、日本工業規格に適合した溶融スラグについては、廃棄物の処分に該当しないよう措置することが必要である。

再生骨材についても、建築物の建替需要の高まり等により、リサイクル材としての利用量を上回る大量のコンクリート塊が発生し、需給のギャップが生じている。このため、現場近傍の再資源化施設へのコンクリート塊の持込を拒否、制限されるなど、工事に支障が生じている例もある。今後も、社会資本の整備や更新によりコンクリート塊の発生量が増大することが見込まれることから、再生骨材の利用拡大に取り組む必要がある。

## 5 廃石綿等の対象範囲の拡大及び無害化処理の促進

- (1) 建築物その他の工作物以外から生ずる石綿を含む産業廃棄物について、その性状が人の健康に係る被害を生ずるおそれがあると認められる場合は、特別管理産業廃棄物としての廃石綿等に該当するよう、その対象範囲を拡大すること。
- (2) 廃石綿等の無害化処理技術の確立に努めるとともに、民間事業者における無害化処理認定施設の普及を促進すること。

(説明)

- (1) 特別管理産業廃棄物に該当する廃石綿等については、平成 18 年政令第 250 号による廃棄物の処理及び清掃に関する法律施行令の改正により、その対象範囲が建築物その他の工作物へと拡大された。しかしながら、人の健康に係る被害を生ずるおそれがある廃石綿等は、建築物その他の工作物以外にも、給食センター等で使用される業務用のガス釜、温蔵庫、冷蔵庫等並びに金庫及び電車の車体等といった多岐にわたる設備から発生するものであり、これらについては特別管理産業廃棄物と同様の取扱いにより適正に処理されるべきである。したがって、法における特別管理産業廃棄物としての廃石綿等の対象範囲の拡大が必要である。
- (2) 廃石綿等の無害化処理については、認定制度が設けられているが、民間事業者における認定の取得は進んでいない。廃石綿等の最終処分量を減少させて最終処分場の延命を図るためにも、国において無害化処理技術の確立に努めるとともに、民間事業者における無害化処理認定施設の普及を促進する必要がある。

## 6 P C B 廃棄物の適正処理の推進

- (1) 早期の P C B 廃棄物の適正処理の推進に向け、拠点的 P C B 廃棄物処理施設の処理能力を向上させるとともに、低濃度 P C B 廃棄物の無害化認定施設を増設するなど処理体制を強化すること。

- (2) 安定器等・汚染物を J E S C O 北海道事業所で処理することに伴う運搬費用及び処理費用の増加に対して、負担軽減措置を講じること。
- (3) 使用中の P C B 含有機器を含めて P C B 廃棄物の早期の処理を実現するため、P C B 廃棄物を適正に保管し処理する必要があることを含めた包括的な広報を実施すること。
- (4) 平成 26 年 6 月に変更された国の「P C B 処理基本計画」で都道府県市の役割とされた未届者の掘り起こし調査について、財政措置等を講じること。

(説明)

- (1) P C B 廃棄物については、P C B 特別措置法施行令の改正により処理期限が平成 28 年 7 月から平成 39 年 3 月に延長された。しかしながら、保管中の漏えいリスクが高まるなど環境保全の見地からも、可能な限り早期に P C B 廃棄物を処理する必要がある。全国 5 か所の拠点的 P C B 廃棄物処理施設について、設備を拡充し処理能力を向上させる必要がある。

また、低濃度 P C B 廃棄物については、現在、全国で環境大臣認定を受けた 19 事業者及び都道府県知事許可を受けた 2 事業者が稼働しているところであるが、絶縁油と容器を合わせた処理ができる施設が 7 施設のみであり処理が進んでいない。国の積極的な関与により早急に容器処理も含めた無害化処理施設を増設するなど、一層その処理体制を強化する必要がある。特に、P C B が漏えいしている機器等については、緊急に処理されるべきであり、一刻も早い処理体制の構築が必要である。

- (2) J E S C O 東京事業所で予定していた安定器等・汚染物の処理が十分に機能しなかったため、平成 26 年 6 月に変更された P C B 廃棄物処理基本計画において、東京事業所管内の安定器等・汚染物は北海道事業所で処理されることとなった。これにより、保管事業者は北海道事業所までの多額の運搬費用を負担しなければならない。加えて、当初東京事業所で 1,810 円 / kg とされていた処理費用が北海道事業所で処理することで 30,240 円 / kg となり保管事業者の負担がかなり重くなるため、P C B 廃棄物処理の推進に支障をきたすおそれがある。東京事業所での安定器等・汚染物の処理の中止は国及び J E S C O の責任であるため、運搬費用及び処理費用の増加に対して、負担軽減措置を講じることが求められる。
- (3) 現在、事業者において保管中の P C B 廃棄物については、特別措置法により届出が義務付けられているが、保管事業者の認識不足により、いまだなお多くの P C B 廃棄物が届出されないまま保管されているおそれがある。また、届出の対象となっていない使用中の P C B 含有機器についても、機器の使用中止を促し適正に処理する必要がある。そのため、経済産業省が保有する P C B 電気工作物データを活用し、使用中の事業者等へ平成 39 年 3 月の処理期限を見据え

たPCB含有機器の処理方法を周知するなど、関係省庁を含めた包括的な広報を実施する必要がある。

- (4) 平成26年6月に変更された国の「PCB処理基本計画」で都道府県市の役割とされた未届出者の掘り起こし調査は、実施にあたり都道府県市にとってかなりの財政負担となるが、その負担について考慮されていない。処理期限内処理のために掘り起こし調査の実施を担保するためには、自治体に過度の負担が生じないようにするとともに、調査に必要な支援を行う必要がある。

## 7 電子マニフェストの普及促進

電子マニフェストについては、平成25年10月に「電子マニフェスト普及拡大に向けたロードマップ」が策定され、普及拡大に向けて取組を進めているところであるが、ロードマップに従い着実に取組を進めるとともに、国において加入の義務化を図ること。

(説明)

電子マニフェストについては、マニフェストの偽造等を防止することで廃棄物適正処理の推進に役立つことや、平成20年4月から開始されたマニフェスト交付等状況報告制度において報告の必要がなく、事業者及び自治体の事務負担の軽減に役立つことから、その普及が望まれる。平成25年10月には国が「電子マニフェスト普及拡大に向けたロードマップ」を策定し、「第三次循環型社会形成推進基本計画」(平成25年5月31日閣議決定)において設定された「平成28年度において利用割合を50%に拡大する。」という目標達成に向けて、様々な取組が行われているところである。

今後はロードマップに従い着実に普及拡大の取組を進めるとともに、国において加入の義務化を図ることが必要である。

## 8 産業廃棄物の不法投棄等原状回復に対する支援策の改善・充実

- (1) 不法投棄等に起因する支障除去等を円滑に進めるため、産業廃棄物適正処理推進基金について、必要額を確保するとともに制度の拡充を図ること。
- (2) 地域の生活環境の保全上著しい支障が懸念される場合に、緊急な対応が可能となるように制度の改善を図ること。

(説明)

- (1) 都道府県等が、産業廃棄物の不法投棄等の支障除去を行った場合は、産業廃棄物適正処理推進センターが、産業廃棄物適正処理推進基金(以下「基金」という。)を活用して支援を行うとされている。しかし、基金の財源状況等により

支援が受けられない場合は、都道府県等が除去費用の全額を負担することとなるため、本来、支援が受けられる事案が排除されることがないように、基金について必要額を確保することが必要である。

また、事前に行う環境への影響調査等は支障除去事業には欠かせないものであるが、これに要する経費は支援事業の対象外となっている。これらの経費についても支援対象とするとともに、平成 25 年度から引き上げられた支障除去費用の都道府県等の負担割合を従来どおりにするなど、都道府県等の負担が増すことのないよう制度の拡充を図る必要がある。

- (2) 現行制度において支援を受けようとする場合は、原則として事前に詳細な環境への影響調査等を行い、その後、事前審査を経て支援の決定を受けてから行政代執行を実施するとされているため、生活環境の保全上の支障が発覚してからその除去まで相当の時間を要することとなる。

このため、基金の活用を速やかに行えるよう事前の環境調査や事前審査等の手続きの簡略化を図るとともに、緊急な対応が求められる事案については事前着工分も審査対象に含めるなど制度の改善が必要である。

## 9 廃棄物処理施設の地震・水害対策等に対する助成制度の拡充について

廃棄物処理、処分施設の地震・水害対策を含めた強靱性を高めることについて、循環型社会形成推進交付金の対象を拡充すること。
---

(説明)

平成 25 年 5 月に閣議決定された廃棄物処理施設整備計画では、地域の核となる廃棄物処理施設については、地震や水害によって稼働不能とならないよう、施設の耐震化、地盤改良、浸水対策等を推進し、強靱性を確保することとしている。

また、廃棄物処理施設を通常の廃棄物処理に加え、災害廃棄物を円滑に処理するための拠点とするため、広域圏ごとに一定程度の余裕を持った焼却施設及び最終処分場の能力を維持し、代替性及び多重性を確保することも求められている。

こうしたことから、積極的な強靱化策、具体的には、既設焼却施設の基幹設備に対する補修、焼却施設や処分場排水処理施設などの津波被害対策などが必要となる。しかしながら、26 年度の交付金制度では、災害対策は、高効率エネルギー回収に伴う場合にのみ交付対象となっている。

災害時において、廃棄物処理施設としての能力を維持するため、既存の焼却施設、処分場排水処理施設等における基幹設備の補修や津波対策など強靱化に資する単独の整備であっても、循環型社会形成推進交付金の対象事業とすることが必要である。